

保育者養成における紙芝居製作の取り組み

三上 廣子

帝京短期大学 こども教育学科

Picture-story show production in preschool teacher training initiatives

Hiroko MIKAMI

Department of Childhood Education. Teikyo Junior College

【要 約】

紙芝居は日本独自の伝統ある児童文化財であることから、保育者養成において学生が物語の内容や作品の魅力を理解できるようにする教材研究として適している。紙芝居は集団の場で演じることを意識して作られるものであり、演じ手と視聴者との交流や集団の成員が同じ物語体験を持てるようにすることが必要である。そのため、研究授業のように学生が幼稚園や保育所などでの場数を踏むことが望まれるが、その実現は難しい。しかし、授業内での模擬保育は可能である。したがって、紙芝居を教材とした児童文化の授業を進めるにあたっては、教材製作やグループ討議にとどまらず、実演する機会を多くすることが重要と思われる。

【キーワード】 保育者養成 紙芝居 授業の取り組み

【Summary】

Because the picture is Japan's own traditional children's cultural heritage as a study of teaching materials for the training of kindergarten teachers that students could understand the appeal of story content and works so that suitable. Important in that picture is consciously playing with this group and made, and actor and audience interaction and group member the same narrative experience should be. Therefore, study lessons to students in kindergarten or nursery, gain experience is desired, but its implementation is difficult. However, childcare within the class is available. Therefore, seem to be important to many students of children's culture using picture cards are not only materials production and group discussions, to demonstrate.

1. はじめに

紙芝居は日本独自の伝統ある児童文化財である。保育における児童文化として、子どもの生活の中には絵本や紙芝居など、お話の世界に入り込んで遊ぶ活動がある。紙芝居は集団で視聴することを想定している。仲間と見る紙芝居は、活躍する主人公と自分を重ねあわせ、共に活動した気持ちになり、心ときめく嬉しい時間を共有できる。絵本やお話の世界に入りこんで遊ぶ活動は大切で、紙芝居はその気持ちを充分満たしてくれる優れた教材といえる。

子どもたちは、保育実践の中での紙芝居から言葉を獲得して成長していく。演じ手の言葉の調子や表情から、その意味と情感を受けとめ、言葉を覚えていく重要な機会ともいえる。保育の中で日常的に行っている紙芝居の読み聞かせは、幼児の心をとらえている魅力ある存在となっている。従って、紙芝居は幼稚園や保

育所など集団の場の教材に適している。

保育者は、理論の基礎知識に加え、子ども一人ひとりの実状を捉え、保育者間の連絡を密にし、協力しあい、援助していく力も身につけなければならない。そこで児童文化論の学びの中においても、授業の取り組みの中に保育者間の連携や子どもを援助していく力も身につけることが求められる。

以上のことから、保育教材として普及している紙芝居を対象に学生の学習実態を検討し、次年度の授業の進め方を修正する契機としたい。

2. 研究の目的

筆者による担当科目「児童文化論」の授業実践を対象に、紙芝居製作過程における学生の「意欲の変化」「紙芝居構成要件の理解」の調査分析、「授業内の学びと実際の学びの違い」から、「授業の進め方」を検討し、今後の修正内容を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 児童文化論の授業で紙芝居製作を行う。

対象・期間

- 1) I期 平成24年5月21日～7月9日
対象：帝京短期大学 こども教育学科
1年生2クラス 58名

紙芝居製作授業 90分授業7コマ

紙芝居製作 活動内容

- ・ 6人～7人程度のグループをつくる。
- ・ 作成するテーマを話し合う。
- ・ 絵コンテ（図案）に落とす。
- ・ 画用紙に下絵を描き、色塗りが始まる。
- ・ ストーリーを仕上げ裏面に書く。
- ・ 演じる練習をし、グループで発表を行う。
- ・ 取り組みの自己評価と感想を書く。

- 2) II期 平成25年6月24日
対象：帝京短期大学 こども教育学科
2年生7名
観察：A幼稚園における実演
年長・中児4クラス
約100名 教諭8名

(2) データ収集を行う。

1) 資料1「自己評価Ⅰ」

紙芝居製作から実演までの活動の過程に対する「取り組み意欲の変化」を評価する。7設問に対して、意欲を「高い・普通・低い」で答える。その理由を自由に記述する。

<意欲7設問>

- ①紙芝居をグループで協力して作ると決ったときの意欲
- ②グループが決まって話し合いを始めたときの意欲
- ③紙芝居を作り始めて協同作業が始まったときの意欲
- ④色塗りへの参加をしたときの意欲
- ⑤ストーリー作りに参加したときの意欲
- ⑥紙芝居を演じる練習にあたっての意欲
- ⑦すべてを終えて意欲的に取り組めたかの総合評価

- 2) 資料2「自己評価Ⅱ」
グループ成員の「討議の実態」を評価する。
- 3) 資料3「実演事後感想」
紙芝居実演後の感想を分析する。
- 4) 資料4「現職者の感想入手後の評価」
幼稚園での実演に同席した現職教諭の感想を聞きとった後、実演に対する評価をする。

(3) 分析・考察手続き

- 1) 資料1を集計し学生の製作から実演に至る過程のうちどの活動に意欲をもったかを分析する。
- 2) 資料1のうち学生1名を抽出し、その自由記述を対象に意欲の過程を考察する。
- 3) 「はじめてのおつかい」と「はなちゃんの白えんぴつ」作品2例を抽出する。「話し合い活動」における筆者の観察から、学生が「困難さ」を感じていた理由を探る。
- 4) 上記3)の2作品を対象に、授業内発表の評価記述内容から紙芝居の構成要素に対する注目点を分類、考察する。
- 5) 幼稚園児を対象に実演した作品2例を対象に、実演後の学生の記述と教師からの「聞き取り調査」を整理し、授業内の学びと実際の学びの違いを検討する。

4. 結果および考察

(1) 資料1「自己評価Ⅰ」

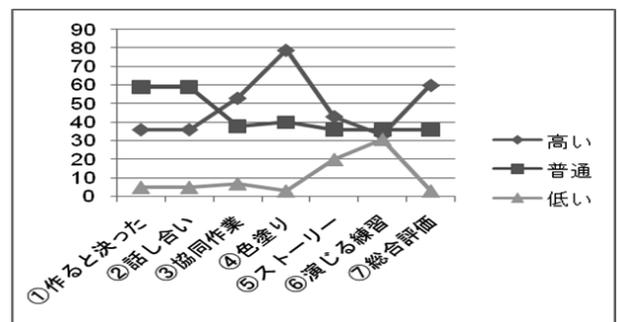
<活動過程に対する取り組み意欲の変化>

7設問の集計は、下記の〈表1〉および〈図1〉に示す通りである。

<表1> 【取り組み意欲の変化「クラス全員の回答」】

N=58

設問	高い		普通		低い	
	名	%	名	%	名	%
①作ると決った	21	36	34	59	3	5
②話し合い	21	36	34	59	3	5
③協同作業	31	53	23	38	4	7
④色塗り	46	79	10	40	2	3
⑤ストーリー	25	43	21	36	12	20
⑥演じる練習	19	33	21	36	18	31
⑦総合評価	35	60	21	36	2	3



<図1>

資料1「取り組み意欲の変化」において、設問ごとの自由記述には、作業の始まりは「作れるのか不

安」、色塗りで「参加できて楽しい」、全てが終わってからの、総合評価では「達成感」をもつことができたといった文言が多く見られる。このことから作業過程半ばまでは、意見を出す人と聴き手にまわる人が分かれたが、色塗りには、ほぼ全員が参加し、色塗りでは最も高い意欲になっている。「色塗り」の意欲が最も高くなったということは「役割があった」と、「意欲」が結びついているということになる。

〈取り組み意欲の具体例〉

資料1に続く学生の自由記述の分析を行う。

〈事例1〉【学生1名自由記述原文】

①作ると決った 普通

紙芝居は個人的にはすごく好きで、絵を描くことも好きなので自分のオリジナル作品が作れることが楽しみでした。ただ、上手にストーリーを作れるのか、短い時間で、グループ全員で、イメージを共有して進めることに不安がありました。

②話し合い 普通

一番初めは、次回予告で紙芝居を作ると聞いて、自分なりに少しアイデアを考えて臨んだのですが、グループの話し合いでほとんど反応が無く、グループのまとまりを感じることができなくて意欲が落ちてしまいました。

③協同作業 高い

グループの話し合いでの進みが悪くて反省したので、しっかりと役割分担を決めました。自分の作業を終えなくてはいけないという責任感が出てきて作業の終わりが見えるので、やる気が高まりました。

④色塗り 高い

他のチームよりも進行が遅れている感じがして少しあせっていました。早く終わらせなければ次の作業に進めないという思いが強くて急いで仕上げようと思っていました。

⑤ストーリー 高い

全員で考えると進まなくて特定の人にアイデアが偏ってしまったので、少人数で考えました。2,3人で考えると、次から次へとたくさんのアイデアが浮かんで来て、想像を膨らませることがすごく楽しかったです。

⑥演じる練習 高い

初めからできている作品をグループで追いかけるのとは違って、一から自分で作ったものなので、みんなに見てもらうことへの楽しみで、不安がとでもありました。よりよく見せたいと思い、自分自身楽しみながら頑張りました。

⑦総合評価 高い

初めはグループで行うことがうまくいかず、意欲も下がってしまいました。紙芝居が少しだけでも進むと、やることも増えて時間内に終わらせなければならないという適度なプレッシャーもありました。作業一つひとつが楽しくなり、意欲的に取り組めたと思います。

(下線部筆者)

事例1の学生は絵を描くことが好きで紙芝居を作ることを楽しみにして授業に臨んだが「①紙芝居を作ると決ったときの意欲」は「上手にストーリーを作れるのか(略)イメージを共有して進めることに不安だった」と記述していて、意欲は「普通」としている。

「②グループが決まって話し合いを始めたときの意欲」も「グループの話し合いでほとんど反応が無く(略)意欲が落ちた」と記述して、意欲は「普通」としている。

①②の下線部をみると、意欲は相当落ちていて「意欲は低い」のではないと思われる記述であるが「普通」としている。筆者は〈図1〉を概観したときに、授業中の学生の姿を振り返り、数値と授業中の学生の姿がおおよそ一致しているという実感をもった。しかし、「資料1に続く自由記述の分析」と「高い、普通、低い」を丁寧に照らし合わせると、評定と記述内容は必ずしも一致していないことから、「高い、普通、低い」の尺度の妥当性に疑義が生じる。

もう一点、学生と授業者の見解が一致していないと思われる項目がある。「紙芝居を演じる練習」の項目は「普通(21名36%)」「低い(18名31%)」の数値で、意欲は下がっている。これは語りの練習を始めたとき、「読み」と「絵」が一致しているのか疑問をもった学生が出たことによる。その学生は図書館から借りてきた紙芝居の裏を見て、「のぞき窓がないと不便だから、のぞき窓を描きたい」という要望を出す。のぞき窓については、作業の能率化を図るため、レポートの絵コンテ(図案)を仕上げた後、その絵をコピーして貼ることとする。しかし、この一言が作業の流れを大きく変えることになる。

学生らは紙芝居のしくみである「のぞき窓」「ト書き」「抜き方のポイント」「演出のポイント」を書き入

れることに本腰を入れて取り組み始める。裏面の作業の多さに気付き「演じる練習」の声を出して読むことを止めてしまう。

学生は「演じる練習」で意欲が低下した理由を「製作の作業時間に多くを取られ演じる練習の時間が取れなかった」と記述している。

筆者はその時、裏面の作業に取り組む姿は紙芝居を演じるための討議と作業で、学生自ら取り組む意欲的な姿であると捉えていた。しかし評定を見る限り「裏書き」と「演じる練習」と「意欲」は結びついていない。自由記述から、学生は「演じる練習」を「読みの練習」と捉え、討議と作業で、上演のための練習ができなかったことに不安を抱いていたと読み取れる。筆者と学生は「演じる練習」の範疇が違っている。筆者は授業中の学生の姿に意欲が低下していたとは思っていなかったのである。

筆者の授業を省察すると、学生の作業や行動など表面に出たことがらにのみ関心を払い、学生の心情までは見えていないことに気付かされる。全体を見て個を見ないという指導する者が最も陥りやすい授業の進め方であったことを反省する。これは筆者が授業内容を見直していく際の課題である。

(2) 資料2「自己評価II」

この設問は、紙芝居への取り組み「討議の様子」を振り返って、自分の所属したグループについての評価を行う。本論では「はじめてのおつかい」と「はなちゃんの白えんぴつ」を作成したグループの「討議の様子」に焦点をあて検討、分析する。「自己評価II」は、回答形式「○はい・×いいえ・?分からない」と、あえて「分からない」を入れ、グループのメンバーを意識していたか否かにも着眼することによって、意欲とは反対の極にある「困難さ」の実態について分析をする。「自己評価II」の「討議の様子」は、〈表2〉・〈表3〉の結果で示す通りである。

〈表2〉【「はじめてのおつかい」の結果】7名

設 問	○	×	?
ほとんどの人が考えを述べていた	6	0	1
考えを出す人は決まっていた	7	0	0
無口な人の存在気がかりだった	4	2	1
参加しない人の存在気がかり	7	0	0
イメージの共有が難しかった	2	4	1
意見を出すと出過ぎか心配	4	3	0

〈表3〉【「はなちゃんの白えんぴつ」の結果】6名

設 問	○	×	?
ほとんどの人が考えを述べていた	3	2	1
考えを出す人は決まっていた	4	1	1
無口な人の存在気がかりだった	2	1	3
参加しない人の存在気がかり	3	0	3
イメージの共有が難しかった	2	2	2
意見を出すと出過ぎか心配	0	5	1

この結果から学生がもっとも「困難さ」を感じていたのはグループ内の「討議」であったと見受けられる。

そこで、討議の様子を振り返ってみることにする。

〈表2〉グループ成員7名の「はじめてのおつかい」の場合、「ほとんどの人が考えを述べていた」と6名が回答しながらも「考えを出す人は決まっていた」「話し合いに参加してこない人の存在気がかりだった」と7名全員が回答している。グループの成員が考えを出し合い、考えを共有して活動することの難しさが数値に表れている。

〈表3〉グループ成員6名の「はなちゃんの白えんぴつ」の場合、「考えを出す人は決まっていた」と4名が回答し、「意見を出すと出過ぎか心配」はゼロ回答で、誰も心配していない。これは、リーダー的存在の人が討議進行の役割をうまくこなしていたということになる。

二つのグループを比較すると、「分からない」と曖昧な回答したのは、「はなちゃんの白えんぴつ」である。「無口な人の存在気がかり」と「参加しない人の存在気がかり」にグループ成員の半数（3名）が答えている。これは討議のとき、自分の役割が良かったのか悪かったのか分からないうちに進行してしまったと読みとれる。

グループでの作業は、協同で取り組むことでお互いを認めていくという過程を必要とする。作業の進み具合の遅かった「はじめてのおつかい」は「ほとんどの人が考えを述べていた」とある。これは意識して意見を拾いあげ、考えを共有していたからである。ということは、人と関わる力が弱く、話し合いの進め方が悪いということではない。考えを共有し、自分がグループのどの位置に存在し、グループ内で何ができるか見極める時間が必要であったことが分かる。ここにグループ作業の「困難さ」がある。

保育者は、連絡を密にし、協力しあい援助していく力も身につけなければならないとすると、学生にとってこの討議の「困難さ」からの学びは大きいといえる。

(3) 資料3「実演事後感想」

事後感想の分析も「自己評価Ⅱ」を分析したグループの「はじめてのおつかい」と「はなちゃんの白えんぴつ」で行う。事後感想の記録は自由記述で複数回答可とする。自由記述をカテゴリーに分類すると、絵、話、発表、テーマの4項目に集約できる。

<事例2>【はじめてのおつかい】複数回答可



絵 37名 64%

色がはっきりしている。色使いがよい。絵の構成が良い。塗り方がうまい。動物の表情が良く出ている。

話 22名 38%

ストーリーが分かりやすい。子ども目線の内容になっている。動物の名前がユニーク。文の構成がよい。

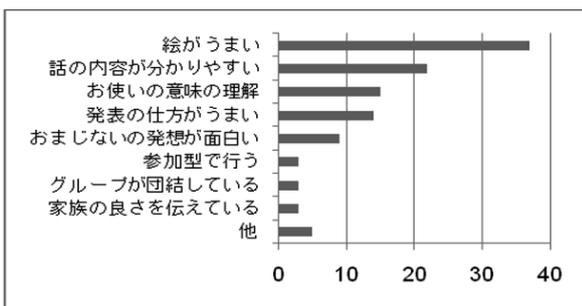
発表 14名 23%

声ははっきりしていて聞き取りやすい。話し方がうまい。

テーマ 27名 47%

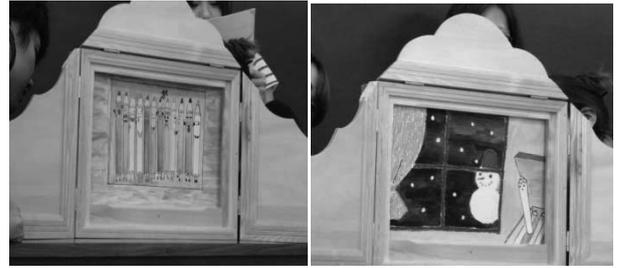
友だちを大切に。頑張ろうとする意識を促す。呪文の発想が面白い。テーマが子ども向き。お使用の意味の理解、自立を促す。一人でできたという達成感。

【実演事後感想「はじめてのおつかい」】



<図2>

<事例3>【はなちゃんの白えんぴつ】複数回答可



話 44名 75%

文章の構成が良い。よくまとまっている。内容が工夫されている。個性がある。子どもに伝わりそう。

絵 38名 65%

丁寧で作成している。絵に個性がある。完成度が高い。カラフルで本物のようだ。色遣いがうまい。縁取りが分かりやすい。

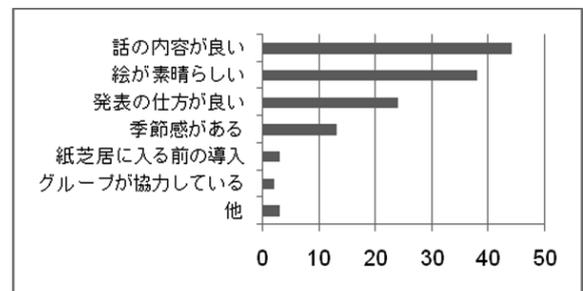
発表 24名 41%

読み方に抑揚があってよい。セリフが多くて子どもに分かりやすい。

テーマ 13名 22%

「しろえんぴつ」を雪に例えている。心情の表し方がうまい。季節感がある。白えんぴつをモチーフにした発想がすごい。

【実演事後感想「はなちゃんの白えんぴつ」】



<図3>

自由記述内容を分類し集計したものが<図2>と<図3>である。さらに、これらをカテゴリーに分類しまとめたものが<表4>である。

<表4>カテゴリーに分類

カテゴリー	おつかい		白えんぴつ	
	名	%	名	%
話	22	38	44	75
絵	37	64	38	65
発表	14	23	24	41
テーマ	27	47	13	22

この二つの紙芝居は「話」「絵」「発表」において、「ストーリーが分かりやすい。文章の構成が良い」「色

がはっきりしている。カラフルで完成度が高い」「聞き取りやすい。読み方に抑揚があってよい」など共通している。

テーマにおいて「はなちゃんの白えんぴつ」は「季節感がある」の一点に絞られている。「はじめてのおつかい」では「呪文の発想が面白い」「お使いの意味」「家族の良さ」の3項目が挙げられている。〈表4〉の 카테고리では3項目を合算する。

もっとも数値が高いのは「はなちゃんの白えんぴつ」の「話」(44人・75%)で、具体的な理由は「文章の構成が良い。よくまとまっている」などである。「はじめてのおつかい」で、数値が高いのは「絵」(37人・64%)であり、「塗り方がうまい。動物の表情が良く出ている」となっている。

こうしたことから学生は紙芝居の構成については、大きく「製作の側面」と「演ずる側面」の視点をもち、さらに具体的な内容を下記のような構成要素として学習している。

<紙芝居製作の側面>

1)「主題・テーマの大切さ」

作品から子どもたちに感じて欲しいこと、訴えたいことがはっきりしていること。

2)「文章の構成」

対象年齢にあったストーリーの内容であること。

現実にはありえないファンタジーでも、子どもの生活に密着し理解しやすいものであること。

3)「作画の仕方」

集団の場で見ると絵のアウトラインや色彩への配慮があり、単純で分かりやすいものであること。

<紙芝居を演ずる側面>

1)「舞台を使う」「抜きや間の効果」「読み手の演出」

ト書きや演出のポイントを活かす。

声がはっきりしていること。セリフの読み方に声に高低や速度に変化をつけること。

構成要件から学んだ紙芝居製作の側面は、既製の紙芝居を子どもの前で読むとき作品を選ぶポイントになる。紙芝居を演ずる側面は、子どもを引きつけ、内容が伝わる演じ方として役に立つといえる。

(4) 資料4「現職者の感想入手後の評価」

2年生7人(ビデオ担当1人を含む)が6月にA幼稚園に出向き、年長・年中児に対し、1年次に作成した紙芝居2本の実演を試みる。

【A幼稚園で実演】



<事例4>【実演終了後、学生から事後感想】

- ・ 演じる場所・対象年齢・対象人数など、あらかじめ知らされていたことと、事実が違っていた。保育をするにあたっての準備(打ち合わせ)の大切さを知った。
- ・ 複数の学生が一つの紙芝居を読み合うなかで、自分の声だけが小さくて子どもの所まで届いていなかったと思う。読み方は紙芝居を演ずる上で最も大切なのに残念に思う。
- ・ 紙芝居を始めるまでの環境はつくってもらったのですがすぐに始められたが、終わり方が考えてなかったのが戸惑った。
- ・ 下読みを何度もしたのに噛んでしまった。実際の場合数を踏むことの大切さを痛感した。
- ・ 子どもの気持ちが紙芝居に吸い寄せられていくのを見て、気持ちがよかった。違う教材でも子どもの前で保育の経験をしてみたい。

学生の感想<事例4>から、授業内発表では気付けない経験をしたことが分かる。授業内ではマイナス面を記録する学生はほとんどいないと言い切れるほど少数意見に対し、自分の未熟さに気付いたり、共通体験の心地よさを感じたり、見てくれている人がいてこそその感想が上がる。授業内の学びと実際の学びの違いは大きいといえる。

<事例5>【実演終了後、教師から事後感想】

- ・ 研究授業だから仕方ないけれど、紙芝居は一人で演じるべきである。紙芝居B4サイズに学生3人では、読み手に視線が行ってしまう。
- ・ 読み手の姿勢が、膝立ちの人や中腰とバラバラで、統一感がない。

- ・紙芝居の後ろの文字を読むことに精一杯という感じであった。
- ・途中までの引き抜きや、さっとめくるなど、紙芝居を演じるテクニックが良かった。
- ・絵のアウトラインと色彩がはっきりしていて、後方でもよく見えた。学生の作品とは思えない、出来栄えて2点とも完成度の高い作品である。
- ・研究授業への意欲的な参加は評価に値する。

授業者は、とかく褒めがちであるが、実習生を多数受け入れているA幼稚園の園長・教師ならではの厳しい感想（〈事例5〉の下線部）も出る。A幼稚園では、この研究授業を保育検討会の議題として取り上げ、感想〈事例4〉をまとめるという作業を通して職員研修に利用したという報告がなされた。こうしたことを考えると、学生が実際に幼稚園や保育園に出向き模擬保育を体験することは、養成校と幼稚園の互いの学び合いの機会となり、保育の質の向上に効果があるといえる。

また、学生は園児からの感想〈事例6〉を教師から得ている。

〈事例6〉【子どもからの感想 教師聞き取り】

- ・もう一回、読んで欲しかったな。
- ・私もおつかいできるよ。
- ・色鉛筆、幼稚園にもあるよね。
- ・色鉛筆で絵を描こうよ。
- ・先生、色鉛筆貸して。

学生は園児が紙芝居を見たことによって、紙芝居の内容や趣旨を受け取り、遊びや行動に新たな変化が加わったことを知り、紙芝居の効果や自分たちが提供する教材の責任をも感じ取る機会を得ることができた。

絵本と紙芝居は似たようなものだと思うがちであるが、全く違うものである。絵本は一人の世界で楽しむものであり、自分だけの世界に入っていく。それに対し、紙芝居は大勢で見た方が楽しく、集団の場で共感あえる。A幼稚園の子どもたちも紙芝居への共感から、心と心が響き合い、人と人を結びつけ外へと広がりを見せる。

こうした紙芝居の特性から、できる限り実演の機会を多くする必要が示唆される。

5. まとめと今後の課題

紙芝居製作を対象に学生の学習実態を検討し、次年

度の授業の進め方を修正していくなかで、今後の課題が明らかになった。

学生の授業への取り組みは、紙芝居製作が始まった時点では、協力したり、話し合ったりというグループ活動における基本的な姿勢は十分とはいえない。グループ活動は、一つひとつの作業に取り組んでいくなかでお互いを認めていくという過程を必要とする。基本的な姿勢が十分ではなかったという理由は、考えを共有した上で、自分がグループのどの位置に存在し、グループ内で何ができるかを見極める時間が必要であったためといえる。授業を進める上で、作業が軌道に乗るまでは十分に時間をかけていくことが求められている。

次の作業である絵の構成や色塗りの段階では高い意欲を持って取り組んでいる。色塗りの意欲が最も高くなったということの背景にはそれぞれの学生に「役割があった」とこと、「製作に携わることの楽しさ」が結びついているという状況がある。製作を終えて、練習の時点での意欲は落ち込んだが、すべてが終わった後の総合評価では6割の学生が意欲的に取り組めたとしている。授業を進めていく上で、何もすることが無いから友だちのすることを見ているという存在の学生を出してはならない。

集大成である授業内発表の模擬保育を通して、学生はテーマの持つ意味や文章の構成、作画のアウトラインや色彩への配慮などについて多くの感想を上げている。さらに「製作の側面」と「演ずる側面」に視点をおき、その重要性に気付いていることに加え、模擬保育から、協力の大切さも感想に上げている。グループ内の協力は、雰囲気を読み取り、連絡を密にし、討議を繰り返さなければならない。よって保育者を目指す学生にとって「人と関わる力」の学びも大きかったと考えられる。人との関わりは、単なる授業の進行状況からでは表面に出て来ない部分であり、授業者としては見抜くことが求められる最も大切なところである。

また、A幼稚園での研究授業の体験を通して、発声の仕方や間の取り方などの語りのテクニックの他に読み手の立ち位置などの重要性が、事後感想での指導によって明らかになる。視聴者がいることで、自分の未熟さに気付いたり、共通体験の心地よさを感じたりすることもできる。授業内の模擬授業の学びと実際の学びの違いは大きいといえる。保育者養成においては授業内での製作や実演にとどまらず、実際の保育の場で実践することが必要であろう。

つまり、紙芝居は集団の場で演じることを意識して作られるものであり、演じ手と子どもたちの交流や同じ物語体験を持てるようにすることに意味がある。可能な限り、実演の経験が必要で、理想は幼稚園や保育

園で実際に子どもの前で演じてみることである。授業15コマの中では大人数で難しく、また実践する幼稚園や保育園もない。そのため、実習先で演じたり、ボランティア活動として幼稚園や保育園を訪問したりすることを奨励するなど、授業において現場で実演することを動機づけることが求められる。

紙芝居等の保育教材は、作成しただけは教材に命は吹き込まれない。学生も使いこなすまでにはイメージできないからだ。実演することで自分が作成した作品に愛着がもて、児童文化の面白さにも気付いていくのである。入学して間もない学生に、紙芝居製作のように多くの時間を割き、見事な出来栄えという評価を得るような大作を望まなくても学びの方法はある。

また、学生が意欲的に授業に取り組むためには、クラス全体の進み具合を見て学生個人の取り組みの様子を見ないという指導は避けなければならない。授業全体の進行具合の表面だけを見るのではなく、学生一人ひとりの心情を見抜くことが必要である。

今後もこの紙芝居製作で得た経験をその後の授業にどのように活かすべきか知見を深め、授業の進め方を修正していく所存である。

【参考文献】

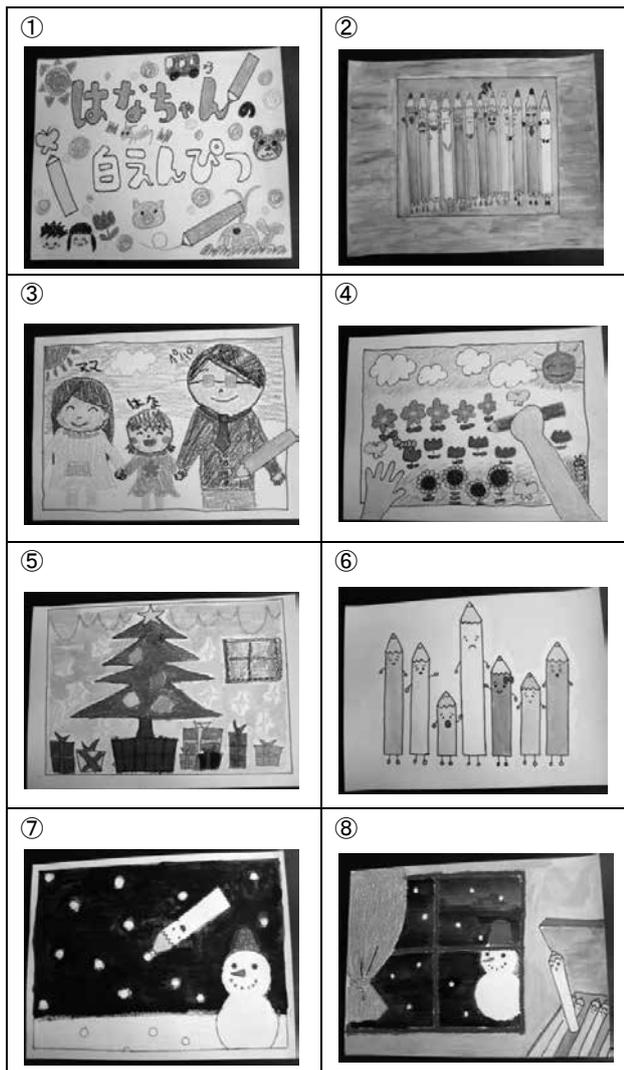
- 1) ときわひとみ「手作り紙芝居講座」
日本図書館協会2009年
- 2) 厚生労働省「保育所保育指針解説」
フレーベル館 2008年
- 3) 溝口綾子「帝京短期大学紀要 No.17」2012年
保育者養成における保育教材に関する授業研究
～パネルシアターの製作・実演を通して～
- 4) 広川信子「保育にもっと紙芝居を」
(竹早教員保育士養成所) 2013.11.10検索
紙芝居講習会のご案内より

- ・本論は平成25年度10月「日本教材学会」で発表した「保育者養成における保育教材に関する研究」～紙芝居の製作・実演の取り組みから～
三上廣子・溝口綾子の共同研究をもとに加筆・再構成したものである。

【謝辞】

- ・研究授業のために時間をさいてくださったA幼稚園の園長先生、諸先生、園児の皆さん、帝京短期大学こども教育学科の学生に感謝申し上げます。

資料 作品【はなちゃんの白えんぴつ】



「はなちゃんの白えんぴつ」

① きょうは、待ちに待ったクリスマス。
お絵かきが大好きなはなちゃんは、サンタさんから
12色の色鉛筆をプレゼントされました。
はな：わあい、わあい。これで いっぱい お絵かきができる。サンタさんありがとう。さあ、何描こうかなあ。
(抜きながら)

② 色鉛筆の箱のなかでは…
ルン：はなちゃん、僕らを使ってどんな絵を描くんだろう。
楽しみだねえ。
早く使ってえ!! と、他の色がわくわくしている中、
おやおや白えんぴつ君、元気がないぞ。
白：どうせ僕なんて、真っ白な紙の上に描けないんだもん。使ってもらえないんだ。

ピンク：そんなこと、言わないで。あなただって立派な色よ。
きっと使ってくれるわ。
ピンクちゃんと言いました。

③ はなちゃんは、さっそく絵を描き始めました。
はな：最初は大好きなパパとママを描こう。
パパのネクタイは赤で。
はなのお洋服はピンクで。

(間)
素敵な家族の絵ができました。

④ 次にはなちゃんは大好きなお花の絵を描きました。
はな：一番大好きなチューリップのお花と、
その次に大好きなひまわりの花と、
あつ、そうだ。チョウチョも描こう!

(間)
そして、また素敵な絵ができました。

はな：次は何かこうかな。
はなちゃんは家の中を行ったり来たり。
はな：あつ、ツリーがあった! (抜きながら)
描いてみよ!!

⑤ はな：緑色と、茶色と一、星はやっぱり黄色ね!
素敵なツリーの絵ができました。
あれあれ、色鉛筆の様子がおかしいぞ??

⑥ 白：ほら、やっぱり僕なんて使われないんだ。
ピンク：そんなことないわ。まだまだ、はなちゃんは
絵を描くわ。あなたの出番がきっと来るわ。
ルン：そうだよ。そうだよ。大丈夫だよ。
みんな白えんぴつ君を励ました。

⑦ 夜になりました。はなちゃんは窓の外を見ました。
はな：あつ、雪が降ってきた。きれいだなあ。
そうだ。これを絵にしよう。
はなちゃんはさっそく色鉛筆を取り出しました。
はな：雪だるまさんの絵も描きたいし、白えんぴつだ!
白えんぴつがあった(さっと抜く)

⑧ ルン：白えんぴつ君、きみの出番だよ。
白：うん。僕にもやっと出番が来た。
みんな、ありがとう。
それから、たくさんの絵を描いたはなちゃんと
12色の色鉛筆達は、笑顔いっぱいの暮らしを送りました。
(おしまい)